

# 日本をキリストへ 協力

6

「日本をキリストへ」  
伝道団体連絡協議会

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1  
OSCCビル日本福音クルセード気付  
TEL 03-295-4414



## 「日本をキリストへ」の協力を

副会長 原 登

首都圏キリスト教大会実行委員会では、超教派による伝道大会を来る一九八八年五月に予定しておりますが、その前哨戦として、婦人大会が去る五月二十五日、青山学院講堂に於て、三浦綾子女士、本田弘慈師を御迎えして開催されました。会するもの二千三百名（推定）で、入場出来なかつた方々も出たほどの盛会でありました。更に、十月十七日には、米国よりレイトン・フォード博士、インドからラメス・リチャード師を御迎えして、「青年大会」を同じ会場で開催する事となっており、前日の十六日には「教職信徒セミナー」、「信徒大会」も計画されており、先日の婦人大会が祝されたように、青年大会もまた、更にまさる大きな祝福をうけるものと信じております。

時あたかも、わが伝道団体連絡協議会では、本会を「青少年伝道年」として、すでに推進委員会委員長菊池良市先生を中心に、「ユース・セレブレーション'87」の計画が進められております。伝道協が、首都圏キリスト教大会とも相呼応して、大きな伝道キャンペーンを展開出来たらまことに幸いな事と存じます。私は、日本キリスト伝道会の責任をもっておりますが「一千万救霊」のビジョンを与えられ、種々の計画をたて、着々と実行されつゝあり、全国的なひろがりを見せつゝあります。

今や終末時代、伝道の絶好のチャンスを迎え、リバイバルの時がひたひたと押しよせつゝあるとの感を深くするものであります。此の時、伝道団体連絡協議会に与えられた使命の重、かつ大であることを思います。

願くは、聖霊の導きが豊かにあり、神の栄光があらわれんことを、切に祈るものであります。

## 〈青少年伝道年に際して〉

### 高校生をどうとらえるのか

あるがままの高校生を知り、それをそのまま受け入れ、そして彼らを福音に導いていくことが求められる。

「保健室からのSOS」という本の中に、最近の高校生のあるがままの姿が書いてある。

- ・ 具体的な指示がないと動かない。
- ・ はっきり言わないと気づかない。
- ・ 自分のものと他人のものとのけじめがつかない。
- ・ わかりきったことでも、ていねいに教えないければならない。
- ・ 自分の行為をコントロールできない。
- ・ 単語だけをならべて話をしようとする。
- ・ 羞恥心に欠ける。
- ・ 遅刻してもヘヤースタイルは整える、宿題をするために授業を抜けるなど規準がおかしい。
- ・ アルバイトに力をいれ、疲れて欠席する。
- ・ 自傷行為をする。
- ・ もうひとつ高校生の実状を知るために「現代高校生嘆歌」という本からいくつかのものを紹介してみよう。
- ・ 学校にどうして行くかときかれれば  
みな行くからと私答える。
- ・ 高校を出ないとバカにされるから

意味はないけど進学したの。

目標は卒業だけでいいのによ、勉強、勉強と師のたまわく。

あと三年、楽しく笑って暮せます、学校生活それで十分。

高校は気楽な稼業ときたもんだ。

いねむり、早弁、エスケープ。

いびられて退部すればなまいきと、またなぐられた部活はこわい。

受験勉強しなけりゃならぬ友だちは、学校であばれて、家で猛勉強。

受験に出るとおどす教師の私生活、パチンコ、麻雀、ゴルフ、ギャンブル。

親と子で進路の話をしるといいう、先生、私のウチを知らずに。

ダメだ、ダメ。何をやるにも頭から反対ばかり、オレ、目になる。

目標をもとと先公よく言うが、もってどうするこんな世の中。

先生も弱い生徒をいじめては、ストレス解消よくやってるよ。

シンナーで補導されたその晩に、初めて家族でメン食いました。

わが親と思えば腹立つ父と母、他人と考え、きょうも過ぎゆく。

・ 酒、タバコ、麻雀、バイクやっても怒らぬ父は本当に親か。

・ 中年の男、けだもの、母泣かせ、きょうも浮気の父さんのバカ。

これらの資料から高校自身の姿、彼らと先生の関係、彼らと家庭の関係が浮きばりにされてくる。

もちろん、一般的傾向で個人をみるのはまちがいである。一人一人ちがう特性、事情がある。

高校生には多様性がある。だから、これやれば高校生が教会に来る、集会に集まるという決め手はない。彼らは自分の好み合った人々と小さなグループをいっぱい作っている。だから、いろいろなことをやって、いろいろなグループの人々を少しずつ集めているのが現状。

高校生を理解するために

①自分の高校生時代を振りかえること。内的葛藤は今も同じ。生きている証を求めてバイクに乗るのだ。

②高校生に触れること。積極的に話しかける。電車の中で高校生の会話に耳を傾ける。高校の文化祭を見に行く。

③本を読む。高校生の書いた本、高校生について書いてある本、高校生のために書かれた本など。

(吉枝師の講演から。文責 姫井)

# 大学生をどうとらえるのか

日本の将来を担う大学生たち、彼らはどのような生活を送り、どのような物の考え方をしているのだろうか。

## 一、現代の学生の現状

四年制の大学が四四六あり、そこに一八四万人の学生が学んでいる。短大は五一七あり、三七万人の学生がいる。

数年前とちがって、今では大学生はエリートではなくなっている。むしろ大衆のひとりなのである。大学生伝道というよりは大衆伝道に位置づけるべきだと思われる。

現代の大学生は、真理探求のために大学に行くというよりは学位取得のため、履歴書に書きこむ学校名のために行っている。

## 二、学生の気質

①勉強せずに遊びたい。大学がレジャーランド化している。

②自己確立の時期ではなくなっている。いつまでも親からの自立が出来ないでいる。

③外に向うよりも内向的である。そのせいかノイローゼ、神経症、うつ病、分裂病が増えている。

④人間関係をうまくやれない。自己中心であり、甘えが強い。

⑤表面的には明るく、活発に見える。スマー

トにスポーツをやるという雰囲気をもって

⑥宗教に関しては、既存の宗教には無関心で、新宗教と呼ばれているようなものにひかれています。

三、どう取り組んでいるのか

教会にしっかり結びついているクリスチャン学生が校内で伝道していくというのが一番ふさわしい。

そこで、K G Kとして今取り組んでいるのは、

## ①伝道の分野

すでに聖書研究会、伝道会、個人伝道などが行なわれてきているが、その他にサークルを多く作ってそれをやっていくことが効果的。小さなサークルで聖書（スクリプチャー）を学び、旅（トラベル）をし、英語（イングリッシュ）を媒介とし、楽しいパーティをする。頭文字を取ってSTEP伝道と呼んでいる。

## ②教育訓練の分野

全人格的訓練を二週間でする。聖書の学びを徹底させる。アジアに学生を送って宣教に目をむけさせる。

（片山主事の講演から。文責姫井）

## ユース・セレブレーション'87

昨年の十一月に開かれた伝道団体連絡協議会の箱根一泊研修懇談会において、一九八七年を「青少年伝道年」にしようと決めました。さらに、八七年の六月頃、視聴覚伝道団体を中心にフェスティバルのようなものを企画しようということになりました。

そこで青少年を対象とする団体と視聴覚団体から人材が出されて青少年伝道年推進委員会が結成されました。

委員長 菊池良市氏（AVセンター）のもと高氏（ミクタム）吉枝氏（HIBA）片岡氏（K G K）ホーランド氏（キャンパス・クルセード）上條氏（WLP）竹内氏（聖書協会）が委員に選ばれました。

青少年伝道年推進のプログラムとして

## 結婚セミナー

が企画されつつあります。並行して視聴覚団体から提案されたフェスティバルが具体化し始めました。その中で、伝道協任意委員から姫井がその委員会に加わって、とにかくフェスティバルを実施しようということになりました。

名称をユース・セレブレーション'87とし、その実行委員会を次のように結成しました。

顧問 本田弘慈、マクビティ、原 登、堀内 顕、兼松正、羽鳥明、滝元明、鈴木留



蔵、久保英夫、大竹一行、岸田馨、市村和夫、村上宣道、渡辺佐次郎、多胡元喜  
 実行委員長 姫井雅夫

広報 上條裕愛、手塚博

コンサート A・ホーランド、高叡華、柳沢

清、菊池良市

財務 片岡伸光、竹内利光

会場 石井寛、吉枝隆邦、森重るつ子、岩崎

喜太男

企画として、セミナー、コンサート、展示をいたします。

セミナーでは

▽視聴覚伝道の基礎 マイク設備を見直そう

(パラビジョン)

▽コンサートPA (ミクタム、PBA)

▽教会における弟子造り(国際ナビゲーター、総動員伝道委員会)

(YWAM)

▽ドラマによる伝道

▽ゴスペル・ミュージック

(ミクタム、ホサナ)

▽ビデオ・映画伝道

▽誰にでもできる伝道

(ライフ企画)

▽FM伝道

▽高校生伝道のニ、ホ、ヘ

▽あなたもできる伝道聖研

▽進化論のウン

▽礼拝音楽

▽愛と性と生命

(キャンパス・クルセード)

(PBA)

(HIBA)

(KGGK)

(パラビジョン)

(クリスチャン・コワイヤ)

(本部企画)

コンサートでは

ポピュラー・ミュージックを中心としたものとクラシック・ミュージックを中心としたもののふたつを企画しました。

展示は13団体が各団体の活動を紹介する展示や即売をいたします。たくさんの方の有益な資料を入手なさることが出来るでしょう。

ユース・セレブレーション'87は視聴覚団体の肝入りで始められたものですが、「青少年伝道年」の企画のひとつとして伝団協に加盟する全団体が何らの形で取り組もうというこゝとで、ここまでまいりました。ぜひその主旨をご理解くださって、各団体から五千円程度の協賛献金をお願いいたします。

来年は、第二回フェスティバルを実施することになると思います。目下、継続委員会のもとで検討がなされております。今秋には、フェスティバル実行委員会が結成され、来年六月をめざして準備が進められていくことでしょう。

このような一連の動きを見つめながら、各団体からの積極的なご協力、ご参加を期待いたしております。これらのことを通して主の栄光が現わされることを祈ります。

●発行日 一九八七年六月一日  
 ●発行者 本田弘慈 ●編集 姫井雅夫